

【解説】しんじつ、まことを信じたい心

新船海三郎（文芸評論家）

山本周五郎は、生涯におよそ四五〇の長短篇を著した。一九二六年、二三歳を前に『文藝春秋』四月号の「須磨寺附近」（懸賞小説に応じた）で文壇に出て以来四〇年の文業として、かなりの数である。映画、テレビ、舞台化された作品も多く、群を抜いている。

それらはまた、武家もの、現代物、下町もの、職人もの……とさまざまにジャンル分けされるが、周五郎みずからがそのように分けたわけではない。小説は人間を書くもの、と信じた周五郎は、むしろ、便宜に分けるその考えを好まなかった。とはいえ例外はあり、そのひとつが、岡場所もの“である。周五郎のもっとも身近にいてよき理解者の木村久邇典は、周五郎が「ほたる放生」「夜の辛夷」「なんの花か薫る」「将監さまの細みち」「つゆのひぬま」をあげてそう呼んだと記している（『山本周五郎はどう読まれてきたか』）。

周五郎の“岡場所もの”は、小島政二郎から「これほどの作品は、一人の作者が一生に何編も書けるものではない、荷風の“娼婦もの”を抜く」と激賞されたが、にもかかわらずそれらをま

とめて収載した短篇集はこれまでなく、味わうにも種々の本を開くしかなかった。本書は、周五郎が挙げた五本に「契りきぬ」「雪と泥」「しづやしづ」を加え、いわば“岡場所もの”の決定版ともいえるものになっている。

“岡場所”とは、現在NHKテレビの大河ドラマ「べらぼう」の舞台になっている吉原が「幕府公認の遊郭」であったのに対して、それ以外の「非公認の遊郭」を指している。幕府公認の遊郭は他に、大坂の新町、京の島原がある。ともに秀吉の「集娼」によってつくられたもの（島原ははじめ柳町に置かれ、移転を重ねて島原に）で、徳川幕府はこれを引き継ぎ、江戸も駿府城下の家康公認の公娼の一部を日本橋人形町に移して営業させた。明暦の大火に遭い、市街化も進んだことから浅草寺北の日本堤附近へ移転させ、新吉原と呼んだ。

集娼は、治安や風俗の取り締まり、また、税金を徴収しやすくするためで、都市周辺部に設けて周囲を溝や堀で囲み、出入口を一カ所にして外部と遮断した。公認遊郭はこうして特別の場所となり、格式高く、しきたりなどもうるさいところだったが、岡場所は代金も安く、気軽に遊べる場所として利用された。

岡場所に人気が集まると公認遊郭はおもしろくない。江戸の場合、（新）吉原の要請を受けて取り締まりはするが、遊郭が（新）吉原一か所では持たないのを知っているのでおざなりにする。それでも何年かに一度は、町奉行所が大規模な手入れをおこなった。遊女をとらえて（新）吉原に送り、競買にかけた。遊女屋は財産の没収や江戸所払いになり、潰れた。

岡場所は各地に生まれ、本書収載の「契りきぬ」のように、五十余万石の城下町の、俗にいう

「河岸っぶち」に三十七八軒集まって一角を形成した。「柳町、松岡町などというほかの花街の者とは区別されて、着物も髪かたちも一定の規格があり、町の子供たちなどにも、——河岸っぶちの後家ということはひと眼でみわけがつくし、すぐ悪口の種にされた」のである。

「岡場所」に落ちてくる女たちは、当然のことだが、それぞれに事情をかかえている。

「契りきぬ」のおなつは隣藩の河修奉行に属する足軽の娘。大洪水に際して洗堰を受け持っていた父と足が流され、倒壊した家の下になった母が骨折、まもなく亡くなるが治療のための借金が残った。ここへ身を落とせばおしまいだというが、自分はあきらめない、家名も身寄りもいっさいなくなったのだから、こんどはこっちの番だ、いざとなれば命を捨ててもいい、そう覚悟を決めている。

「ほたる放生」のお秋は身を落として一〇年。役者のような男に心を奪われ、岡場所を転々とまわされている。男はそのたび金を手にするが、お秋の身は変わるたびに一つまた一つと落ちていく。「しづやしづ」のおしづの背には刺青がある（それでいて湯屋へ行っているのは疑問だが）。やぐざと連れ添い、京、大坂、長崎……、その人と同じようになろうと彫った。別れて三年、後悔して消そうとするが消えてくれない。縁は断ち切っても彫り傷は残った。

「将監さまの細みち」のおひろは、この商売にはほとんどみられない「通い」である。病気の夫と四つになる子がいる。薬を買い暮らしを成り立たせるためには、稼ぎを増やさなければならず、窮地を切り抜ける手段は一つしかなかった。——五十年まえ、五十年あと——、「——五十年まえ

には、あたしはこの世に生れてはいなかった、そして、五十年あとには、死んでしまっただけ、もうこの世にはいない、——あたしってものは、つまりはないものも同然じゃないの、苦しいおもしろい辛いおもしろい、僅かそのあいだのことだ、たいしたことないじゃないのって、思ったのよ」、おひろはそう自分に言いかけせるしかなかった。

NHK大河ドラマの影響か、（新）吉原や岡場所を「一つの文化」「文化の発信地」と見る向きもあるが、そこが女性を前借金で縛る人身売買の場所であったことを忘れては本末転倒である。身を落とさざるを得なかった女たちの悲しみ、遣る瀬なさ、けっして「文化」ゆえにではなく、「前借金で縛る人身売買」にこそあろうからある。

「なんの花か薫る」にこんな場面がある。

藤堂和泉守の家中で重役の一人息子江口房之助が、嫁にと言ったのを真にうけ、お新はふた月、三月、客を取らずに軀が清くなるのを待った。明日、叔父の家で祝宴がある、といった房之助が数日後、喜んでくれ、と現れる。勘当が解けた祝いだった、それにもう一つ、許嫁と内祝言を挙げた、と言う。みんなあつけにとられるなか、みどり、それでどうなるんだ、お前さんはそれでも人間か、となる。みどりたちを部屋から出して二人きりになったときである。

房之助は、「あれをまさか、本気にしたんじゃないだろうな」と言う。

客に身分がつけばつくほど、寝物語は言葉の遊び。遊び慣れないウブな藩重役の息子でも、それはわきまえている。わきまえて遊ぶ分、罪は深い。望んで沈めた身ではない女たちは、どこか

で誰かの言葉を信じ、言葉にまことを見て取って救われたいと思っている。が、世の中は沈んだ者にはことさら薄情にできている。「まさか」のひとつ言こそ、女たちへの蔑みを重々、背骨はおろか身体髪膚に染み渡らせた言葉である。待たならなお、身分制と女卑を土台にしてそれがある。

幾度かそれで痛い目に遭うと、女たちは「雪と泥」のおしのように、ウブな男を手玉にとつて、あわよくばいくらか懐にと企む。女ばかりは責められないだろう。周五郎はその辺りをよく手配りして、五千石の大身の息子ながら、父親の蓄財術のある意味で犠牲でもあるその姿をえがき出す。跡取りがいなくなつては、貯めた金の使い道もなくなろうというものだが、岡場所といわず武家社会の浮き沈みはともあれ、日掛け取りの婆さんだけは、きょうも忘れず集金にくる。

濃淡それぞれの「岡場所もの」だが、通底する何かをあげるとするなら、人を信じる、信じきる、ということになるだろうか。なによりも「つゆのひぬま」のおぶんである。訪れた良助の身のうちを知るにつけ、不遇の身を呪うようにして父をあやめ自死した兄を重ねた。預けた匕首を返せといい、これから押し込みに行くという良助に、おぶんは心いっぱい話す。

兄を勝手だといい、おぶんの苦勞を台無しにする、草鞋を作っても紙袋を貼つても生きてゆけるはずだ、というけれど、その言葉をそっくり良さんにかえすわ、兄が生きてゆけるなら良さんこそ生きてゆけるはずだ……。当座のことは私がなんとかする。

この世界で客に心を寄せるのはご法度である。だが、おぶんは良助を信じた。信じたいと思つた。水害の夜、おぶんは年上のおひろと二人、店に残る。大雨のあと満潮になり、高潮が来た。

たちまち嵩を増し、二人は引窓から屋根へ抜け出した。雨はあがり星も見えたが、前も左右も水に浸かった屋根ばかり。ひっそりとした無人の屋根が無気味に見えた。

死ぬのか。おひろが身の上を語り出したとき、「おーい」という声とバシヤバシヤと水を掻く響きが聞こえた。

「待つてたのよ」「良さんが来るだろうと思つて、あたし待つてたのよ」

おひろは、「この水の中を来てくれたこと、忘れちゃあだめよ。これがしんじつつていうものよ」と言い、おぶんの懐に自分の財布を押し込む。

おぶんだけではないのである。おひろもまた、人間のしんじつ、まことを信じたがつている。騙され、裏切られ、本当を語れば嗤われる世間を、それでもどこかで、人を信じて生きたいと思つているのである。この場所できているからこそ、その思いはいつそう哀切にひびく。

それだけに、男を計ろうとした心の歪みや墮したわが身を卑下する心を、「契りきぬ」のおなつも、「しづやしづ」のおしづも、許せなかった。信と真を知つて初めて知る恥じる心、その重さ。男のまことに応えられる自分であるか、沈めた身にしか分からないその答えを彼女たちは求めて生きる。周五郎は、いっしょに連れ添つて生きればいいではないか、という読後感を与えないように、余情はひろげつつも凜然とした女たちの心根を掬つて作品を閉じる。そうせざるを得ない、と決め込む女たちの心の錯雑は、男中心と性を商品とする社会のゆがみを映し、なおそれが生きつづける現代社会を強く撃つて止まないものである。